# 故郷（4）

（「私」は自宅で甥の話し相手をしていました。）

「まあまあ、こんなになって、ひげをこんなに生やして」不意にかん高い声がひびいた。

びっくりして頭をあげてみると、私の前には、頬骨の出た、唇のうすい、五十がらみの女が立っていた。両手を腰にあてがい、※スカートをはかないズボン姿で足を開いて立ったところは、まるで製図用の脚の細いコンパスそっくりだった。

私はドキンとした。

「忘れたかね？　よく抱っこしてあげたものだが」

①<u>ますますドキンとした</u>。さいわい、母があらわれて口添えしてくれた。

「ながいこと家にいなかったから、見忘れてしまってね。おまえ、おぼえているだろ」と私に向って「ほら、筋むかいの楊おばさん……豆腐屋の」

そうそう、思い出した。そういえば子どものころ、筋むかいの豆腐屋に、楊おばさんという人が一日じゅう坐っていて、「※豆腐屋小町」と呼ばれていたっけ。しかし、その人なら白粉を塗っていたし、頬骨もこんなに出ていないし、唇もこんなにうすくはなかったはずだ。それに一日じゅう坐っていたのだから、こんなコンパスのような姿勢は、見ようにも見られなかった。そのころ噂では、かの女のお蔭で豆腐屋は商売繁昌だとされた。たぶん年齢のせいだろうか、私はそういうことにさっぱり関心がなかった。そのため見忘れてしまったのである。

（中略）

「忘れたのかい？　なにしろ身分のあるお方は②<u>眼が上を向いている</u>からね……」

「そんな訳じゃないよ……ぼくは……」私はどぎまぎして、立ちあがった。

「それならね、お聞きなさいよ、迅ちゃん。あんた、金持ちになったんでしょ。持ち運びだって、重くて不便ですよ。こんなガラクタ道具、じゃまだから、あたしにくれてしまいなさいよ。あたしたち貧乏人には、けっこう役に立ちますからね」

「ぼくは金持ちじゃないよ。これを売って、その金で……」

「おやおや、まあまあ、知事さまになっても金持ちじゃない？　げんにお妾が三人もいて、お出ましは八人かきの轎で、それでも金持ちじゃない？　フン、だまそうたって、そうはいきませんよ」

返事のしようがないので、私は口を閉じたまま立っていた。

「ああ、ああ、金がたまれば財布のひもをしめる。財布のひもをしめるからまたたまる……」コンパスは、ふくれっつらで背を向けると、ぶつぶつ言いながら、ゆっくりした足どりで出ていった。行きがけの駄賃に母の手袋をズボンの下へねじこんで。

（竹内好訳『魯迅文集Ⅰ』筑摩書房　所収「故郷」による。一部表記を変えた箇所がある）

※スカートを～……当時の中国の女性はズボンの上にひだのあるスカートを着けていたが、労働の際にはこのスカートをとった。

豆腐屋小町……原文の豆腐西施を訳したもの。西施は古代中国の女性で美人のたとえ。ここでは日本で美人のたとえとされる小野小町を当てている。

**確認テスト** 本文を読んで、問いに答えなさい。

**(1)** ――線①「ますますドキンとした」のはなぜか。適当なものを選びなさい。

**ア** ひさびさに会った楊おばさんが、子どものころとはずいぶん違っていたから。

**イ** 見知っているような口ぶりで声をかけられたが、相手が誰だかわからなかったから。

**ウ** 自分が金持ちであると嫌味を言われ、返事のしようがなかったから。

〔　　〕

**(2)** ――線②「眼が上を向いている」とはここではどういうことを表しているか。適当なものを選びなさい。

**ア** お金のことばかり考えているということ。

**イ** 身分がある人の言いなりになるということ。

**ウ** 身分が低いものを気にかけないということ。

〔　　〕

**(3)** 本文の内容に合うものを選びなさい。

**ア** 昔と同じコンパスのような楊おばさんの姿勢を見て、「私」は楊おばさんのことを思い出した。

**イ** 金持ちであることを否定する「私」に、楊おばさんは非難するような口ぶりで言い返した。

**ウ** 道具をくれるよう求められた「私」は、楊おばさんの帰り際に、母の手袋を手渡した。

〔　　〕